

この度、国際関係委員会委員長の大和三重先生からお話を頂戴し、  
The 5th International Conference on Master of Social Work (MSW) Program  
Social Work Response to Crisis, Trauma and Disaster:  
Implications on Curriculum Design for Social Service Administration

(第五回ソーシャルワーク教育カリキュラムに関する国際会議：危機・トラウマ・災害に対するソーシャルサービスの運営管理のあり方)にて発表する機会を得た。若輩の身で大役を仰せつかり恐縮至極ではあったが、災害大国ともいえる日本における災害支援とソーシャルワークについて発信し、また、世界の動向も知るために、四川大地震（2008年）で大きな被害のあった中国四川省成都に出向いた。本報告では、会議の様子と中国におけるソーシャルワーク（中国語では社会工作と表記）の展開、また、改めて認識した日本の地域福祉における概念の妙（？）などを記したい。

会議は、2014年7月17日から19日まで、四川大学が災害復興の研究拠点となるべく香港理工大学と共同でキャンパス内に設置した、大規模な設備を有する研究センターで開催された。一日目は、イギリス、アメリカ、タイ、台湾、日本からの発題者によるプレゼンテーションと討論、二日目と三日目はワークショップで、ワークショップのテーマは「トラウマ対応と危機介入」「コミュニティにおけるリスク回避と持続可能な開発」「トラウマへのアートセラピーと心理的支援」「ソーシャルワークのスーパービジョン」であった。私は、日程の都合で一日目のみの参加となったが、中国におけるソーシャルワークの実践と教育への熱意が感じられる場であった。参加者は、広大な中国の各地からやってきたソーシャルワーク教育従事者や大学院生、大学生などで、「例えば、このような実践もソーシャルワークなのか？」「ソーシャルワーク教育のポイントは何か？」などという質問が相次いでいた。

私の報告テーマは「被災後の生活支援の課題とソーシャルワーク実践—社会福祉協議会のソーシャルワーカーの取り組み—」(Reconstruction of victim's life after disaster and social work practice :Focusing social workers who work at local social welfare councils)

であった。報告後に、参加者から「被災者は、何故そんなに長く仮設住宅に住まなければならないのか？」「住民主体、住民合意という考え方をもう少し説明してほしい」という質問を頂戴した。質疑応答の様子は割愛するが、わが国の地域福祉推進の方法におけるキーワードでもある概念について、改めて、理念実現のための難しさや、であるからこそ地域福祉が発展していったともいえる背景を再認識した。日本を、地元を離れてみて、改めて思うことの意味は深い。

今回このような機会をいただき、国際会議事務局関係者や学校連盟に感謝するとともに、今後も自己研鑽を続けたいと思う。